



蘭說
辨惑

磐水夜話

下

特別
凡 8
3035
2



特

門 凡 8
號 3035
卷 2

蘭說辨或
般石水先

卷之下

生口授

門人

福知山醫官有馬元晁文伸筆記

燈山

○食料

曰てい又く和蘭人食料をいふかゝるものや世々魚
食するものや唐人がさうといひ又燻茶を多く

上野元律

昭和二十七年
七月廿九日
購求

吃^から^らの^のと^とゆ^ゆと^と人^人は^はど^どと^とい^いふ

着てい^いち^ちく^く美^美国^国人^人を^を牛^牛乳^乳乃^乃類^類を^を常^常食^食と^とす^するとい^い
わ^わの^のり^り起^起強^強く^くな^なる^るべ^べし^し是^是を^を中^中ん^ん飯^飯支^支那^那と^と呼^呼ぶ^ぶに^に
お^おま^まを^をい^いは^はふ^ふか^か食^食料^料と^とか^かは^はと^との^のな^なの^の我^我邦^邦を^を守^守り^り
油^油を^を受^受け^ける^る國^國は^は海^海を^を産^産す^する^るの^のよ^よて^て自^自由^由に^に是^是の^の衣^衣
一^一山^山乃^乃と^とお^おも^もむ^むし^しの^の用^用ひ^ひぬ^ぬ米^米と^と見^見ゆ^ゆ外^外國^國ハ
多^多く^く地^地産^産品^品は^は國^國外^外の^の油^油を^を一^一さ^さと^とい^いふ^ふよ^よし^しの^の
て^てを^を百^百里^里より^り三^三百^百里^里ふ^ふい^いき^きる^ると^と從^從右^右海^海に^に物^物を^を

て^て用^用を^をし^しる^るが^がこ^この^の身^身知^知と^と法^法一^一に^に位^位む^む物^物を^をと^と食^食す^す
と^とな^なり^りし^しる^るの^のよ^よし^しと^とい^いふ^ふ一^一豕^豕な^など^どを^を食^食料^料と^とす^する^る一^一
天^天より^り生^生じ^じお^おも^もむ^むし^しの^のと^とお^おも^もむ^むし^しの^の長^長を^を我^我國^國
より^りと^と小^小玉^玉本^本を^を路^路の^の山^山尖^尖か^かど^どを^を油^油と^とす^する^る所^所の^のよ^よ
する^ると^とい^いふ^ふの^のよ^よし^しと^とい^いふ^ふに^に猪^猪を^を食^食料^料と^とす^する^る所^所の^のよ^よ
先^先と^と同^同じ^じの^のよ^よし^しと^とい^いふ^ふに^に茶^茶を^を食^食料^料と^とす^する^る所^所の^のよ^よ
料^料の^の油^油を^を食^食料^料と^とす^する^る所^所の^のよ^よし^しと^とい^いふ^ふに^に猪^猪を^を食^食料^料と^とす^する^る所^所の^のよ^よ
了^了し^しぬ^ぬと^とい^いふ^ふに^に猪^猪を^を食^食料^料と^とす^する^る所^所の^のよ^よし^しと^とい^いふ^ふに^に猪^猪を^を食^食料^料と^とす^する^る所^所の^のよ^よ

上野談新

類も性固より人好まらむなりとの常食とてと
 むも調理のきつこいげととよく熟煮して用ふ事
 て必しと生煮のるひを鮮肉は拍味なれどとき腸
 胃へ入て消化しきこめは食せと我和菜人
 なども獸魚とと異形のものみくじりしるる食
 ひはあゆめものを甲斐のものといひて食ふ事と欲せ
 どとなり鮫鱧章魚烏賊などいふ振るもれを食ふ
 ど魚と棘鬚魚比目魚鱒鯉の類ありといふも稚子

鹿など云々其脂はよく有毒のもの多くを用ひ
 となり犬馬の類を固より食料とせぬ事なり勿論
 飲食し常度ありて必しとこえ豪酒飽食ハ
 きぬといふ故にわが人の平生鮮肉を食ひ市井
 無頼の後といふやうに松魚二尾とほくせりといひ
 或は汁杯の酒を一頓しとてさしなごふを吹か
 せ彼人共をも且嘆とんごうやとむごころを多く吹く
 といふ大頭の大さ木長管を用ひていふなり

びー全件取きろを瓷器ヤシシの一〜一長管一
 かりを久〜脂ヤシとかりぬ工夫くわしてろや〜
 碎布ヤシ易き取一〜一なり長さ尺得よふ心
 煙氣ヤシの咽のんどを薫うぶる事一と為うきやうふと考へる
 竹い〜大頭い太ひな枝ちごと管ち一をぶる穴あまで細く
 且うそのもむごとくそのもむとゆびゆして烈毒れつどくを去り
 乾く〜かりとのよ〜を彼人かの煙茶えんちを脹はらりた
 煙えんを吞のとゆぐふ吹ふかたなり事一類れいを張はり〜

ゆくゆを〜一〜二三吸えそやむなり此かれ人のごと
 く短管ミツツツ一〜一住し中ちゆう外がい用ようのたま〜一〜一
 わ〜どとなり此辨論へんろん予よの葛録くわろくの中ちゆう一詳しやう〜一と

○黒坊

何〜一〜私茶しちや一〜一なる事こと黒坊くわふと〜一〜のたよ
 水みづをか錬れん一長ちやう〜一を〜一といひ又また猿さるの類るい
 なりと〜一〜物ものや〜一〜曰いは崑崙くわんわん奴ぼと
 一〜一の名な天竺てんぢく地方ちゆうほうの官員くわんいんなり和蘭人わらんじん一いや〜一

こそ召仕ひしうへあつうへ彼地方所の人よ
 て皆南極出地の國ゆゑ甚く酷熱其國くなり
 々其れは身體日く照けあつて色いよつて黒
 且卑賤其れを裸體ヌドとて陰處をけり
 かりとれなうといふも拳毛けんもうのわうとや
 釋迦しやくぢあなど天竺てんぢくめうら則意蘭にえらんといふ海峯大熱
 地の産うままうく頭かぶの螺髮らほつなりと火熱かつうそちま
 ころり其餘五百羅漢ごはくて或を祖そと或を裸ヌドの

人あり土地のけさかゆ多なるべし此黒坊といふ
 ところも貴賤賢愚けんごれりや其れを近傍同國
 同種の人どうしゆといへ人間にんげんといへるなりといふ
 水鍊すゐて長ぐといふとをさうて人外にんげんのものなとい
 ふいゝをわくどぞ和蘭人わらんじん銘々めいめいれ自分僕おれといふ
 取合とりあひ次第しだいて用をさうとるうへ食たべ事ことの召仕諸しよ
 使つかれ類るいのひを縫ぬいての洗濯水せんたくすい汲くみ米搗厨まいたしの子供こどもい
 何といふ差別さべつをなす和蘭人わらんじん「そワるとんじ」といふ


三身法苑珠林

四

「すわつととち黒ひま」「うんど」といふも少者なりこ
とつひとのといふ奴隷僕従こゝろのちげんはささるべし。私中私
働するを「ゆさうら」水夫の事とて、の茶院人なりしや

○おんなんや

ゆく曰いひ庖厨いひなり「うんぱんや」といふすしといふ
こゝろや 善しといふく、の茶いひの厨いひなりとて「うん
ぱん」といふは誤りなりや全件「うんなんや」と
いふ「うんぱん」を「うん」といふこと此のやゆするなりと

禱とのまをと僮と舎と所とといふやうなる事あり私蘭
七州は七王互いひひしお僮舎を諸国交易との坐とをぬ
るといふ法の役人とを捕とへ海との貨物とを仕とる
ぬ法とへ南と北とを東と西とをなすといふも坐との
うら「いびり」といふ所とを坐とを座と場ととて向とへ坐と
ら法とを「おう」といふといふとむぐき」と云ふ法と
僮舎とといふ事なるやうに、いふやうに坐との法と也と
N  といふ記と論とをとてくとら法とは「ぬ」でといふとせと

とといんぢいせらんこびどぐぎい」といふ四言其字數
 して三十六字なり其頭字カウラなるをさるるをよむ
 不和蘭文字なり則和蘭催合坐カウヒダといふことなりと
 ぞ此カウラて官物よ清用なと書なると同どるこか
 ぶー西方諸國よとゆここれ所わりといふ

○ 志ききてふ

いこく志ききてるるとして人の體カウダより火とるる其
 わりといふいなるものなり 昔曰此圖をさる

一 森崑氏カウクワンのわくをさるの紅毛雜話カウカウよ詳なり其
 「志ききてるるとして」といふ語の轉カウなり和蘭國
 語をてを「ひひふるカ。石カといふ人の體よ
 火を取といふるなり」をわくぞふくといふゆ
 と火出ふなりと後ハ金石カウなり其れひて火を生
 ずる此理カウしてカウ燧金火打石カウと名なりゆゑ火石性
 カ此名わりのなり天地の氣相摩カウして電光カウ
 のわくはる此理カウと示カウしる道具カウなりとぞその

さだへわらうとのより火おわらまをわらどたきよ
 里火乃おてゆら所なる火殺すなりかくれり理
 わらうとふていつて怪しきもあまにけりず理を辨
 まて火の族とらやう巧く出さる器なりともをさ
 理を朝夕每家一用し火打石とおなぐらことありと
 知るべし

○景画燈籠

向いけくせしる景画燈籠といふもの和蘭の

とのなることとて暗室中へ小燈をおり然し仕懸わら
 しくやゆふと掛とるる白地乃くあまのしつりく
 漆色の繪画しけり人おなまきば帯ぬ人の長ほどよ
 て候いあまがむらたなり何といふものやいふか仕
 くけなるものや
 和蘭の
 妖燈
 といふことなりとやえ、兒女子は玩弄の器なりあ
 けり並けり小箱ハ先をすしその内へ火を點し

其の透用へ硝子一画をり繪を逆ゆき一入
どお影轉倒して向あうる地へ順一うけり
且形大一なるかすう後を眼といふもの萬物来映
して内一景と道理と同じくしてそのもので
見てその理を辨ぎ速一解るなるべし理一
昧さ人しとを仰解しごとこのゆゑ妖燈の名
わたりや

○殺活車

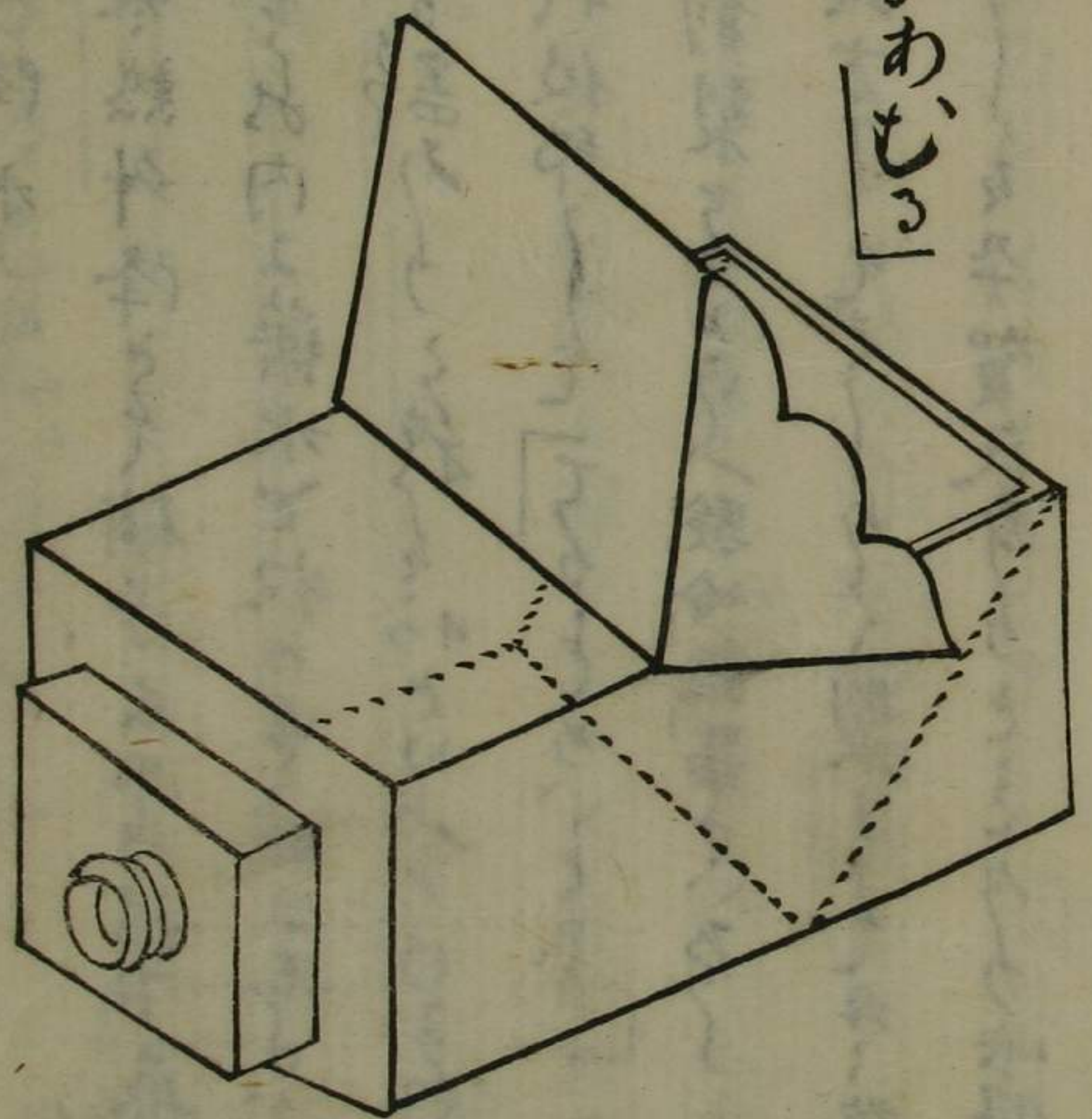
向ていく儀一死活硝子。殺活車とて硝子内へ氣
融れ生物を入き死活をなさしむる器をいふ
う後をいなるものや

答曰こ後と「御くとがむ」といふ器なる
ことありし生物な天地は大氣中又立てその
空氣を呼吸して死活をなす理を示るる器
といふ彼國理学家の製するものなりて其窮理の
書一因訖なりとや

○写真鏡

甲い〜。若れ〜。硝子乃鏡を仕つけ。山水人物を
 うつ〜。画ある。此此〜して写真鏡とよぶ。そのあり。
 元、鑿製のり〜。ちと〜。の〜。や。
 きて曰。〜。鏡を「どん〜。あじふ」といふ。苦なり。此あり。
 家と往々擬製とる。そのあり。甚ど工夫〜。苦
 なり。ま〜。写真鏡の各所をぬき〜。い〜。
 黄履莊。臨畫鏡と此とのなり〜。

「どんあらかあじふ」



○升降水

甲くいこく寒熱升降とて硝子長管其下底を球たま
 一蓋あり其内ニ藥水で収め其暖ふきこびその
 水外降する蓋ありとて其を何と云ふものや
 蓋て曰く彼彼邦とて「てつとめい」と云ふ「せふ
 黄履莊と創製するといふ驗冷熱器といはるるは其
 なるべし此方一とていふなりとて其熱升降
 と名づるなりとて平賀氏なりとてこころなり此條驗器

種々のありて其陰晴を知る器なり「うゑいぶく」と
 といふものありとて其を所謂驗燥湿器なりとて
 甲く風を鳴らすとて其器なり「どんどんがく」とい
 ふ器なりといふも製法を理字ありとていふなり



てつとめいといふ

○らんせいゐ。ばんごふさ

尚ていも、外科者流常て用るる針を「らんせい」といひ吸ゆくを「ばんごふさ」とりふこまき又其の蛮名なりや

「らんせい」を「らんせい」と呼ぶらんせいを「らんせい」と呼ぶらんせいを「らんせい」と呼ぶらんせいを「らんせい」と呼ぶらんせいを「らんせい」と呼ぶらんせいを「らんせい」と呼ぶらんせいを「らんせい」と呼ぶらんせい

用漢土は角法と云なり、人々、其の所なきは、
「らんせい」と呼ぶらんせいを「らんせい」と呼ぶらんせい

○入津は始并長寄旅館

「らんせい」と呼ぶらんせいを「らんせい」と呼ぶらんせいを「らんせい」と呼ぶらんせいを「らんせい」と呼ぶらんせいを「らんせい」と呼ぶらんせい

一、^イあまのりとなりりそは寛永年中一回国を漆
の漆^ニ一^ニなりりゆとか^ニい^ニ向^ニび^ニ二百年^一を
及ゆ^ニとか^ニ又^ニ盲^ニ愚^ニ昧^ニなる^ニ婦^ニ女子^ニハ^ニ是^ニ時^ニを^ニ度^ニの^ニ地^ニに
移^ニり^ニお^ニぼ^ニし^ニ又^ニと^ニ此^ニを^ニお^ニ人^ニと^ニ彼^ニ人^ニと^ニ移^ニり^ニ居^ニる^ニ事^ニの
や^ニり^ニ又^ニお^ニも^ニお^ニ者^ニと^ニあり^ニ大^ニなる^ニら^ニら^ニび^ニひ^ニなり^ニ清^ニ人^ニお
らん^ニお^ニ人^ニと^ニと^ニり^ニ者^ニく^ニ居^ニ館^ニあり^ニ和^ニ菜^ニ人^ニ積^ニ寓^ニハ
同^ニ所^ニ江^ニ戸^ニ町^ニと^ニい^ニなる^ニま^ニの^ニ洒^ニ岸^ニは^ニ築^ニか^ニし^ニあり^ニ小
寄^ニり^ニ名^ニは^ニあ^ニり^ニお^ニ寄^ニり^ニとい^ニふ^ニその^ニ地^ニの^ニ小^ニと^ニ向^ニひ^ニ西^ニ詞^ニが

法^ニ役^ニ人^ニお^ニ入^ニり^ニ門^ニあり^ニと^ニお^ニ地^ニの^ニ西^ニ川^ニ氏^ニを^ニ漆^ニ板^ニを^ニ漆^ニと^ニい^ニふ
書^ニり^ニし^ニて^ニ漆^ニを^ニ洋^ニよ^ニき^ニり^ニお^ニ清^ニ人^ニの^ニ館^ニを^ニ十^ニ里^ニ村^ニと^ニ云
所^ニを^ニ漆^ニの^ニ東^ニの^ニ町^ニと^ニい^ニふ^ニと^ニお^ニ所^ニあり^ニ此
一^ニ唐^ニ船^ニを^ニ岸^ニと^ニお^ニれ^ニい^ニふ^ニと^ニあり^ニ大^ニ徳^ニ寺^ニと^ニい^ニふ
寺^ニあり^ニその^ニ下^ニに^ニお^ニる^ニ地^ニの^ニあり^ニ右^ニの^ニと^ニい^ニふ^ニ所^ニに^ニ
て^ニ小^ニ宮^ニと^ニい^ニふ^ニ村^ニあり^ニは^ニ村^ニと^ニ寺^ニとの^ニ間^ニあり^ニお^ニ寄^ニり^ニ
を^ニ地^ニ面^ニよ^ニか^ニど^ニお^ニり^ニく^ニ見^ニゆ^ニる^ニなり^ニ余^ニは^ニ徳^ニ宗^ニを^ニ徳^ニ宗^ニと^ニい^ニふ
一^ニ所^ニは^ニ徳^ニ宗^ニと^ニい^ニふ^ニ同^ニ板^ニと^ニい^ニふ^ニ所^ニは^ニ徳^ニ宗^ニを^ニ徳^ニ宗^ニと^ニい^ニふ

求むる一唐人和蘭人兩館に留まり大畧を志
すし其れをその地へ飛せしめて家業を志し
しし其れを其れ海峽の中より入り

○江戸系向の由來及交易

甲いけく和蘭人率く其れ江戸へ來りて其れ必
なりや倭人より高唐人とのさぶさぶをいひ
うしこまなりなりその中其れいなりなり
著しくいそくし其れを以て其れ海峽をゆるし

冥加にきりりし先づりて毎去方物を携へく
拜謁し系向なり其れ其れを以て其れ恒例
て正月十五日七夜に寄鎮の諸役人和蘭人三
名并り大小通詞等數十人を引率し三月れ初
拜謁し登城し方物数件を献じ其れ其れ
其れ其れ領事の由りし其れ其れ其れ其れ
其れ七通よりゆりりり本國七王へ送り其れ
領り其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

初秋入津の後七八九月三ヶ月の長を請か考のうらまて
種々此代物^{ちりよぶ}の俵^{はたけ}を〜とぞ、今年来るる秋入津は
の去年以来出寄^{でせ}滞^{とど}る此ものと交代^{かいかい}し、新^{あらた}びん朱
墨^{すゐ}乃^{すなは}お湯^ゆの書記役^{しやく}を携^{たづな}へ凡^{たゞ}其^{その}人^{ひと}を糸向^{いとむけ}と
いぬ

○糸向^{いとむけ}のびん書記役^{しやく}外^{ほか}料^{りょう}

甲^あい^いい^いく^く年^{ねん}く^く江戸^{江戸}へ^へ来^きる^るびん^{びん}とい^いつ^つる^る官^{くわん}職^{しやく}の^の名^な
な^なる^る又^{また}わ^わり^り何^{なに}ぞ^ぞの^の義^ぎあ^ある^ること^{こと}〜[〜]や

長^{ちやう}曰^い「[〽]びん^{びん}と^とい^いふ^ふを^を改^かめ^めと^とい^いふ^ふ事^{こと}〜[〜]
彼^か方^{かた}の^の雅^{みやび}言^{ごん}〜[〜]「[〽]びん^{びん}と^とい^いふ^ふ和^わ蘭^{らん}國^{こく}語^ご〜[〜]ハ
「[〽]お^おは^はゆ^ゆら^らほ^ほゆ^ゆと^とい^いふ^ふ〜[〜]後^{のち}を^を頭^{あたま}と^と長^{ちやう}と
と^とい^いふ^ふ事^{こと}詞^{ことば}の^のま^まを^を凡^{たゞ}て^て頭^{あたま}役^{やく}れ^れもの^{もの}を^を何^{なに}ふ^ふく^くの^の
か^かび^びて^てい^いん^んと^とい^いふ^ふ事^{こと}な^なり^りを^を〜[〜]縣^{せん}長^{ちやう}の^の事^{こと}も^も「[〽]ら
び^らて^てい^いん^んと^とい^いふ^ふ事^{こと}此^{こゝ}「[〽]お^おは^はゆ^ゆら^らほ^ほゆ^ゆと^とい^いふ^ふ事^{こと}船^{ふね}中^{ちゆう}交^{かう}易^い
物^{もの}の^の事^{こと}〜[〜]を^を〜[〜]無^む司^しと^とい^いふ^ふ事^{こと}な^なり^りと^と〜[〜]書^{しよ}記^き役^{やく}と
い^いふ^ふ事^{こと}の^のを^を彼^か國^{こく}に^に詞^{ことば}〜[〜]「[〽]わ^わ〜[〜]比^ひて^て人^{ひと}と^と〜[〜]と^とい^いふ^ふ事^{こと}船^{ふね}中^{ちゆう}〜[〜]

糸向^{いとむけ}のびん書記役^{しやく}外^{ほか}料^{りょう}

十^{じゆ}

よりお寄りなすは大勢なすを日ある事一な後ごとび
 せんしと誣ひ江戸へ来りたるも中此頭取うそ彼詞を
 「志こつていむ」と称するなりやぞ醫者も多く内外
 科を兼ぬ有るなり其中 外科より内科を兼ぬ
 有りあが多きなりといふことと和蘭を外科
 の術一長ドをりよりを以て諸民は為一醫
 官ごころその療術茶方等問難對話よりあり
 とて召呼りまると笑ひしより召呼る前ハ江戸より

膏藥油茶等主治を通詞をりて毎度彼外科より
 為るを後いし事とをいひしなり本仁大夫といふ
 譯家の祖父三大夫といへふなどといふ大母の詞をりて
 書を以てしめていひしと和解書此草稿を余は
 甚きなり時見きり事一なり此を以ていひしなり
 毎度いひしんぬ湯より兼向此節書は彼外科を以て
 あり事とありいひしときなり今より二四十年
 一己おゆをを和詞といひしなり彼國語をいひし

ひよ〜外科 侍書といふもの〜おも 湯を多き
たれれおなりとすゆりなる

○外科

いそいそと松蘭齋とてて信せけん 外科のす
ふまこれやう〜いふげ 外科

いそいそと松蘭齋とてて信せけん 外科のす
ふまこれやう〜いふげ 外科
いそいそと松蘭齋とてて信せけん 外科のす
ふまこれやう〜いふげ 外科

いそいそと松蘭齋とてて信せけん 外科のす
ふまこれやう〜いふげ 外科
いそいそと松蘭齋とてて信せけん 外科のす
ふまこれやう〜いふげ 外科
いそいそと松蘭齋とてて信せけん 外科のす
ふまこれやう〜いふげ 外科

痘瘡麻疹の類外法はよく知らしむるを感ぜしむるは
 らるは内治の外法と云ふはまことにききし渡海の船
 中とて同じごとくなり外症なりて内症を
 わるゆへに或は私中にて内治外治と分りて
 を来りしれどもその醫者も同じし内外科を兼
 りたりと云ふは彼書を考ふに内科は治療方法
 にかんじし精密明細の事をして其國名哲に撰べし
 所は書影しくわつ凡を醫とすそのを先づ

才一一人身平素は内の一體を知るを能くす
 と立きりそのゆへ四肢百體外を皮肉毛髮より
 内を臟腑脈絡筋膜よりきりて解き
 割しして知るを窺ひしをて病因を論じ法
 を施ししをて其を研究する事は
 ききし事なれば其趣をききしなり醫術の中
 内科よりなりて容易に修めしごとくなり
 けづしき業ありて全俸内科を醫家の中

として位階よれとのよし呼んで「たぬい」といふ
 といふ尊號は辞なり一名「どくさふら」といふ
 くれがとれとのありし私をたすりてみざ
 する地因きぬこころは外科とてと良工といふ
 てを同ドノ才なるを船一り乗りて多くハ
 技術一せりそんきりとのそ修業はそ出世せ
 公認る外科内浪を乗来るとし折くを内科
 本業の人として學術研精のしり波歴さんとす
かきまわつけんせい
まわつせい
ためり

来るをわりのとなり外科を彼國の詞を「たぬい
 めい」といふ「ゆこま」といふと「たぬい」といふ
 洗と船中をそと内科兼役とあり「どく
 とふら」と稱するなり船一艘一兩人はそなり
 ぶち一人を「おつゆらめい」といひ「まき」とい
 んで「めい」といふと「たぬい」を通稱し家上外科
 「下外科」といふ「おつゆら」といふ「たぬい」とい
 なる江戸へ系向るもの「おつゆらめい」といふ

本草
 卷之六

十一

て別よ、糸科なり、其の後、^と有る、^りかごとく
以て、^な「^どと^ふ」と稱するがごとく

○和蘭及咬啗吧大畧并世界略

「^いと^く」^中ん^どと^ふ中^をい^づと^ふ角^一
わ^らう^り唐山^{やう}の^いは^か花^うる^る國^の也
蓋^てい^はく[、]全^作世^界と^いふ^を四^つふ^かち^に
と^四大^洲と^いふ^を西^一の^一大^洲を^歐羅^巴と^いふ^中
中^んど^とふ^中「^あら^わづ^け」^に属^{する}國^をと^いふ^を

「^祢い^でら^んど」^とい^ふ中^に全^く中^んど^を一^統
より^中郡^七州^{あり}と^いふ^を一^つと^いふ^を中^んど^を中^んど^と
中^んど^を中^んど^と「^あら^わづ^け」^とい^ふ中^に一^つと^いふ^を
一^つ七^州を^中稱^{して}中^んど^とい^ふ中^に一^つと^いふ^を中^んど^と
我^國一^つ大^和國^{あり}て^中名^をや^中と^いふ^を中^んど^と
小^極地^は二^三度^{あり}て^中候^極あり^て中^んど^と
日本^{より}中^の海^程八^千六^百里^{ほど}あり^て中^んど^と
を^中ん^どと^いふ^を中^んど^と「^あら^わづ^け」^とい^ふ中^に一^つと^いふ^を

うぶむ」といふ地あり 諸國乃高船を洗ゆり往来
 して繁華地也此所より日本并り諸國
 へ交易の船を装て出て發帆し大南洋を宗也
 凡そ四月をりり少して亞弗利加といふ一大洲の
 極南の地「喝」ハといふ漆し船をぎめ風波をりて
 を考へそれより東洋へ趣き追風するも大抵
 三月をりて咬啣吧へ至るも此咬啣吧を應帝
 亞細亞といふ一大洲の南海中をりて赤道以南

六夜余り一島の熱地なり 舊名瓜哇。あつひを訶陵又
わや蒙人とかや 中へ「ガ」いひ「あ」といふ所ありやん
わたこと 此領地とあり「居館をへりて」せ「祕るあり」といふ
 舟の職を居て之を後於督などいふに官名を
 此地の親司なりとや「いひせん」か及の法役人か此命
 令をうりて交易の貨物無川高松性来れ其扱を
 ぶりしなり東へりるは法にへる皆此地より仕立
 るとなり行商より東の諸國へ通商する所凡二十餘



ケ國なりと我々地名別々同書一を不承その
 のりの中 廣東へ去年しく十三被ばきとあり
 且此地へ去来而往は乃船艘一々輻湊といふ唐山
 其人多く漳州人由焉一承とありとて東方
 船へ申一船おれく此地へ帆一熟算用をな
 本國中へんぶへ送るや一なり年々日本へ流る
 とわす一本はよりなりつらむらむらわく此地を去
 乃未後船一由風まて六月日あがり七月けりゆぐ
 ありて

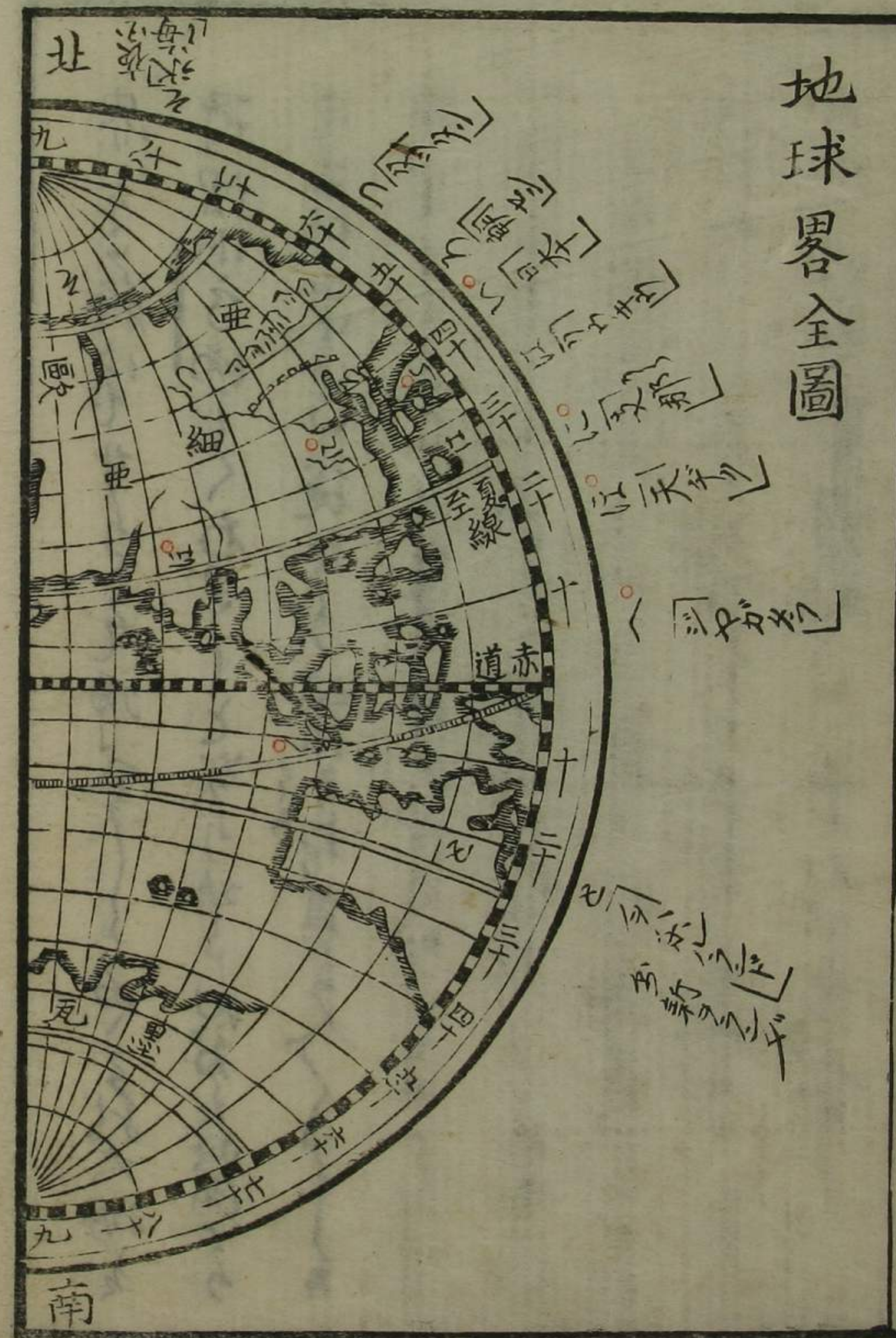
よ長崎へ去る岸をれそ海程千二百里とありんといふ
 て着岸の後七八九と三番月交易は本津一た例九月
 サ日長崎の津を帆一里ほど先手ゆぐ船を泊り
 地こそ恐人敷を用向さ海に舟十月上旬ゆぐ小舟にて
 舟船一承とて存れ帆をあげて「た」びの「越」
 たり年國并よむが多し此大畧海流は次第あり
 かれりなり詳なる事とて總世界の海に「回」説おれ
 その書より考べし海流は事とて長崎人の書

きりつてこれと見ゆる航海畧記といふものありて之を簡
約一くさし綴つてゐるものなり紅毛雜話といふあきし
を倭せりつる也一唐山を亞細亞といふ一大洲又屬一
東へよりつる國ゆゑ我邦へは海程遠し然るんば地力へ
と地は遠きなまじと亞弗利加歐羅巴は三大陸の法
小をへてそをまじとた程教ありて容易といふべし
ぞえり代へておたかといふ國はこれを見ればきんと
許多の人教をわしきりつる小なる湖はわつ所をいひて世

界をこつたはななりとて端なりとやこれ大湖を
所謂小島といふなりとわつととなりていふは此海より
も北にありといふ地なりは活きを用ひて人々を
辨じりてゝと及ぬ事なまじとたつとていふも
一やうよまじとをりて悪なる婦女子は害すそのあつは
一を説きおたことなりとていふは世衆のあつては
因をわしとていふをききて活きを用ひて人々を
わしにわしは悪事をおしとていふを考ふべし

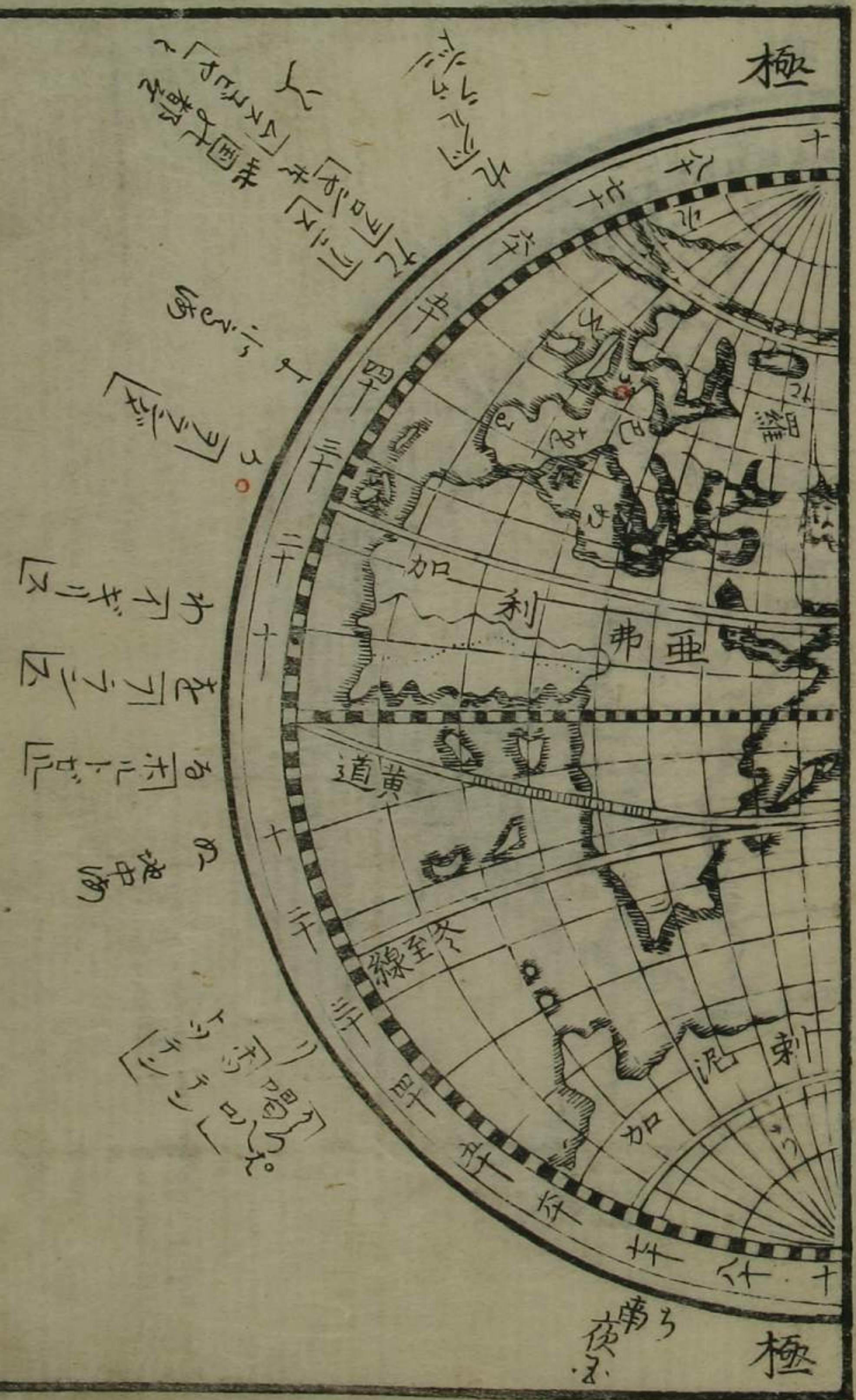
新說新志

地球畧全圖



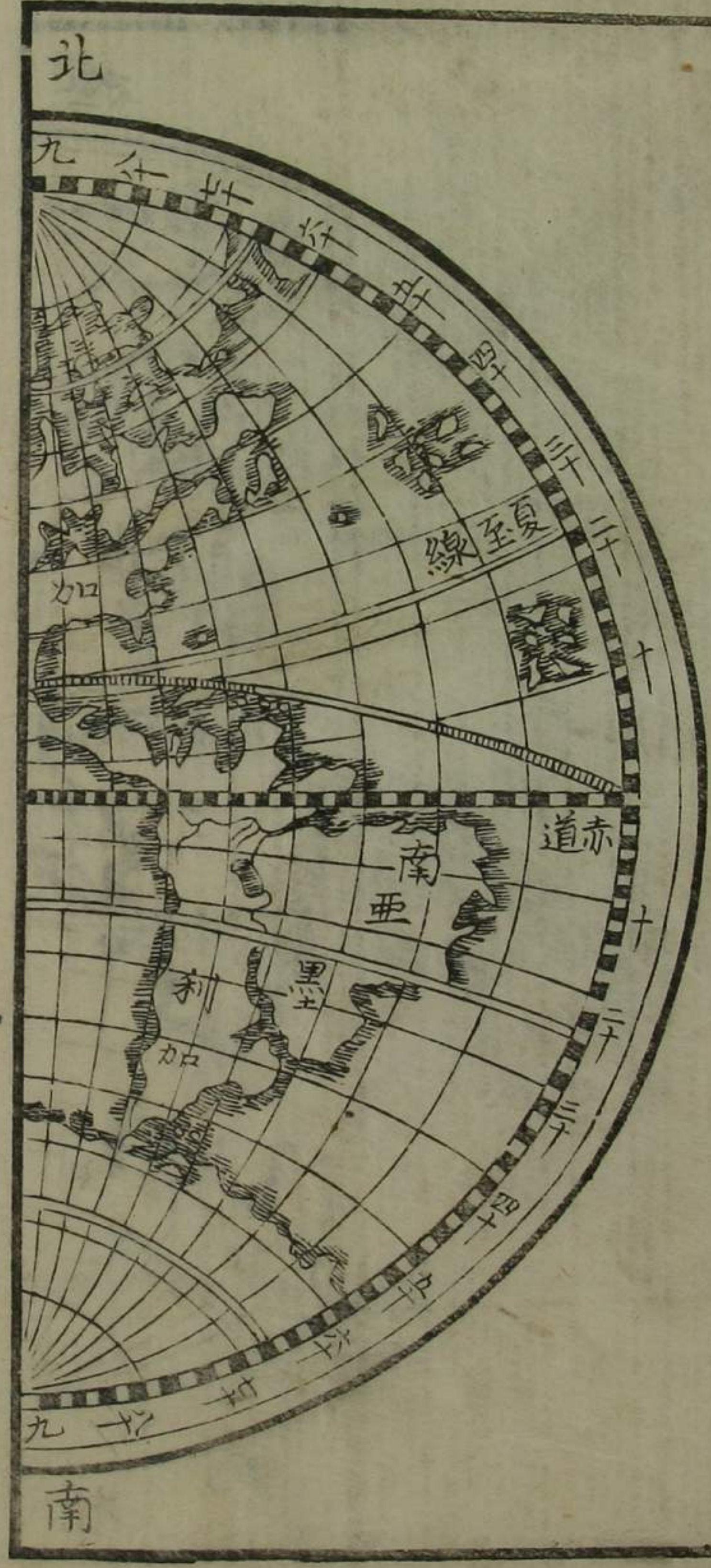
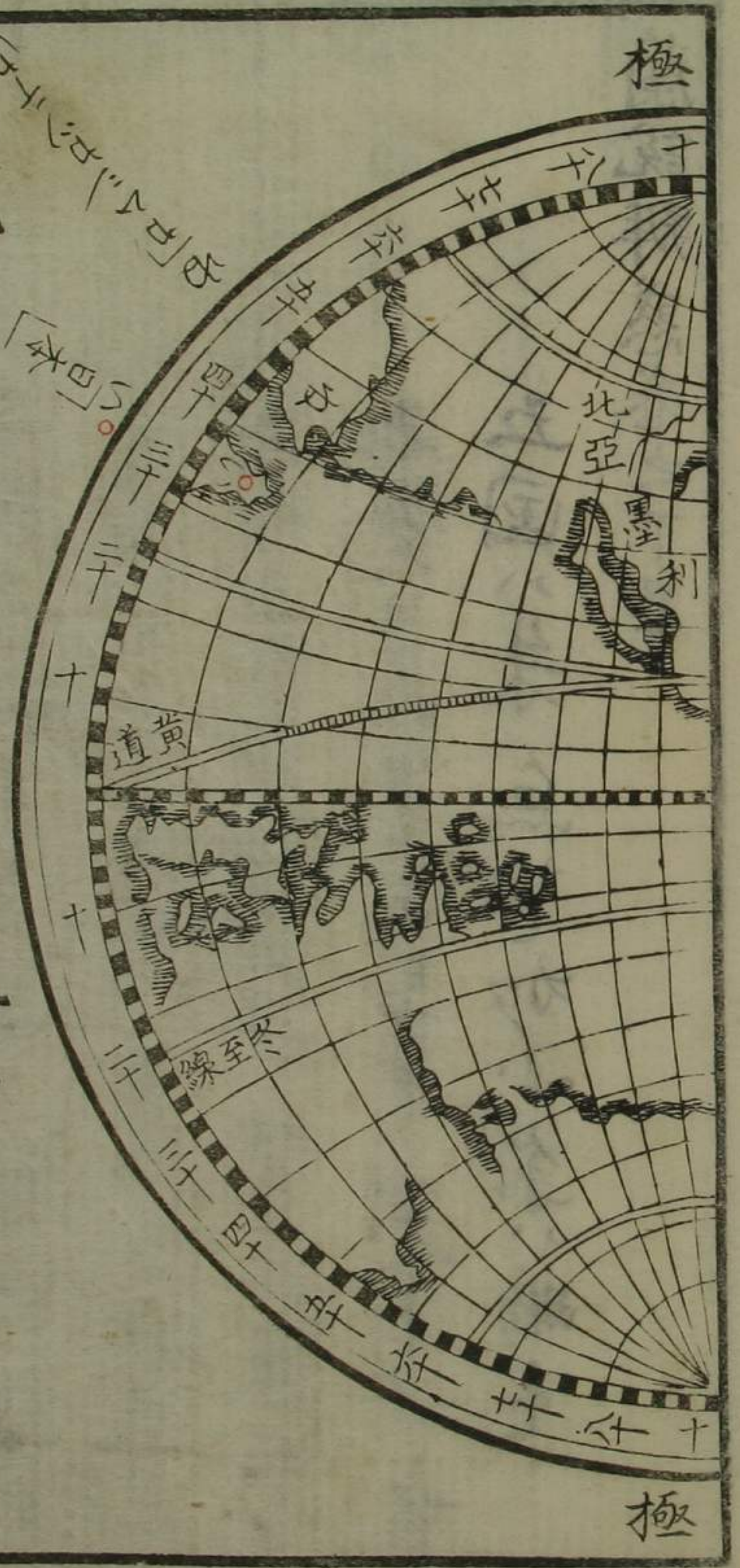
十三

極



極

我午之冬為友人越邨子虛寫
 於江戶客舍岳山川邑



東洋圖

七五

西洋圖

十四

右略地圖中一二志を其所の
正號等くいのち俗同通稱と志を
て考く一は國ハ日本支那たしとさか天竺
等の方位を
五國ハ朱点を加ふ余ハ略を

蘭說辨惑卷之下畢

附錄

鸚齋杉田先生六十壽序

今茲壬子鸚齋先生年甫六十矣令嗣士
業開壽筵先生嘗學蘭化先生首唱斯業
于我邦蘭化先生亦齡七旬迎而偕壽
之欲賀斯業之肇基兼侑其嘉觴於是乎
金蘭之交暨其弟子小子茂實之徒遐邇
相約翕然來集莫不賀焉茂實嘗踵二師

蘭說辨惑

附錄

一

之門兼聲咳久矣不敢稱其壽乎乃奉觴
 而前曰茂質嘗事先生在其塾也先生語
 余曰我醫之道上古邈矣當戰國秦漢之
 際有素靈之書出命以聖人之作其所述
 五運六氣陰陽旺相生剋分配之說超高
 精微以飾以矜魏晉以降數百載之際苟
 志于醫者宗之源之推崇奉戴蛙譟雷同
 要之其說虛幻妄誕牽合傳會實用之道

殆墜于地施及我邦醫流奉承久矣日
 遷月錮慣習成風以為羣說雖有齟齬信
 之弗疑又從而為之辭無有出其範圍獨
 立而發矇者嗚乎不可歎乎當元祿室永
 之際洛有後藤良山者為人豪邁宏量卓
 識駁古來之醫說陰陽五行運氣勝復之
 論一洒之特基一家之說其嗣椿菴及弟
 子香修庵山東洋諸子傑然其時能畢先

師之業於此乎以道瞭然而明其見解之高劑和之巧無愧于漢醫惜哉其所論說雖較可據未盡精微是無他皆取諸胸臆無有折衷得正者也方今國家昇平文運日躋德化之所蒸餘澤之攸及異邦殊域梯貢航獻之盛也和蘭之學崩然而興嘗聞其邦人精于諸術能葺杭于四方鍾衆邦之美以為其韞究物理之奧致極實

際之至蹟星曆醫算為其最讀其邦之書籍原其所以主張其治療之術者醫人之業其要在知人身內外肢竅臟腑經絡關節之樞會欲苟志于醫者不本于斯則不能執刀圭而中其肯綮也醫家之精巧權輿于斯因得其內景之書求刑屍以剝解之參諸其所圖符合無差與漢人之所說大異乃悱然發憤矚然改視刻意於和蘭之

學銳志厚繙譯之業蘭化先生嘗學于崎
港能其義余乃竭蹶赴之以師事之迺與
同臭之徒相校相閱終成內景新譯之書
因讀其治方之書皆無不履實究與試諸
事之與物則左取右取必逢其原余業之
及于斯非唯宿志之適實藉天之寵靈遭
開業之秋豈不一大盛舉哉余等老矣此
道之大成非所及也能繼其志續其緒則

在吾子之徒其勉矣哉 茂質 誓首載拜曰
敬受命矣夫父有志則子續之師有志則
弟子成之余自受教念念在斯常常不忘
請雖不敏奉教繼志無敢失墜勉厲有年
得稍就緒業然資性罷駑未能金聲以玉
振之唯願與士業戮力竭心終身以集成
其業耳二師曰善哉言乎勉而無怠噫二
師之業大矣偉矣天地剖判以來未曾有

蘭學新志 附錄 四
醫術之若，是精者也。外之奚適世之志，干斯業者能觀其書而知保生之所育百骸之所關，以其研究之方施之，諸證則上自天子下至萬民，凡有稟生之氣者，免漫為螻蟻之食，吁嗟其業之臻于斯也。不唯二師之榮實天下蒼生之福也。其壽者福祥不啻三唱南山，天保焉宜直與此道永傳于無疆，使天下之民免天昏札瘥之患，躋

仁壽和煦之域，兵遂志其事，以為壽序寬政四年壬子十一月二日

蘭學會盟引

惟寬政甲寅十一月癸丑日南至，越若來閏月甲子及群賢會于芝蘭堂，尋西學翻譯之盟也。何為用是日乃大西洋一千七百九十四年正月上日也。何用其上日今讀其書肄其業於其穀旦者，祝斯業之大成。

也夫物之有偏長雖聖人有不及焉故仲尼問禮於老聃學樂諸師襄豈直人也哉管仲師馬陞明師蟻苟道之所存誰氏非吾師夫吾醫之道炎黃以降聖賢間出草討脩潤蓋無餘蘊矣雖然邈哉遠乎吾奚以論其世也哉其載諸簡蓋在蒼姬之末乎時則終始五德施亂我道古者稱萬物今也五其數亭強傳會動見其間淄渑合

流薰藉同器論包宇宙失在眉睫豈可盡信其書哉自此厥後非無僑傑多禁其方後死莫述獨有長沙氏立言而不朽然唯舉其綱未張其目尋及後世載籍極博唯是繁而寡用語詔而不詳非失函莽則弊擊空嗜亦何是徵焉始吾思之忘寢忘食幸遇先覺聞斯業其為術也近取諸身遠取諸物施諸行事則親切著明矣豈其空言

涵辭之所企及哉夫西方之人其性機巧
 上自天文曆數下至凡百技藝精工縝密
 幾奪天工唐都洛下箱口千古魯般工倖
 攬指九原日月所照孰出其右豈風土之
 使然抑何妙也則獨奚於我醫而疑之哉
 愚者所笑賢者察焉吾與諸君雖欲不師
 之將焉得不師嗚乎無怠無荒解其乎甲
 成其華實子々無已者其從今日始

右二篇之文得諸磐水漫草也蓋說斯學
 所由而起未有若是詳而盡者故附錄以
 公於同志云寬政戊午之冬越村深藏識

蘭說辨惑附錄畢

蘭說辨惑終おる志る也

昭代の運八蠻來聘し四夷化し歸して
 貢くとこ詔のたから百家終ふみ
 洒けくち抄へ法と書置からんそり
 中身も阿蘭陀飛と終毛くまた家
 らきくくのら書りゆらうひん六
 大洲をるまありいつるものにしを

名稱主用未とくくあをらめ法々し
あはく形人々幾ハ古ハと里其名
其用未とわわア架法々々るもの海い
走々あからあ近々後阿蘭雅學子に
こまを漢藉梵文蘭篆

皇國尔全備してお海々々あ免れ者
の六とこのふさるハあしに我

鷓齋杉田先生蘭藉翻譯の大業
を草創しあひしを里々々し乃
みちハさうももいんははをそあ免
れ者ハの國といふ國の方位う法
たものく名稱主用尔ハたるまを直
尔蘭藉にきししとたかあし法を
はしりたるとよあ人形々めら且

先生純篤子磐水大槻君いよく飛
るく見安きうり余志のまゝいそ十
の業を成立しあらんと純出く返
せしいとふあしゆあるこのまゝを
海をふともあら君乃門のみをふか
すいきふそらふら丹波國有馬文仲
といふもの世ふいひもとくも此数條

も君ふとび正して筆録しそ蘭
説辨惑と題せふその稿深とく
なるよいふもそ身まの事ぬるさ
いそらもあしそふこのゆゑに君
の門生らるるさしそはた上本のま
とまははるも何もいそ君よいそ
ねも君かしそはなぬもさくもあとい

あはれん瑣々たはふ言と二三子の一
 時徒問よふ多へる免せ家ののち好孝
 豈世乎公みしく識者徒らじを未
 秘くへんおのめん世よもあこと那
 めれとのあひしよ梨門生おるれを
 たまひしうふあまとも君の人とあり
 一時の雑話としくとも寧よらるるに

いじろ才たしれたとへふあきまは
 表めし強はん大の書徒こと記小冊子
 といへとも西洋の群書おじろくた
 しくとも多へるあしあへるが實録か
 孝和漢古今の書徒中お辨明しあ
 たきものおれは世の人おまとも珍と
 しく傳寫しともおまともこと十數

年美久羅昔日君をとりも
 先生の門にありをひしころ君の西洋の
 ものうたをよみかみりてよも彙録しそ
 てもあおねをよむも乃安孝いよる名
 く蘭話詰問一助とあそんとねもふ
 こと久しきころみ一日この書をよ君の門
 人しりり文仲りたの記におのれり筆記

せるものよりふまはまをよみたと萬々
 きれと法をくくみ寫し法たへく魯魚
 鳥焉のあやまをよみかみりてよも文仲
 りあを法をよみし法を君に校正をて經く
 上木のこと試君ふらとよまの前言の
 かとくあるく終ハやむとよむるはくを
 いみしころ彙録せよとて法の筆記

とり奉りて終校讎しく友人肅夫り不
 ち勞しく新圖を製していそりに
 家刻をたれ君の素志みぢむくうおと
 くふれとも謄寫たひりむをむとくひよ
 くあやまるも後よ流るゝ人ぬまぬ
 流るしもし佗日君の一覽を經ハおの
 ましとるも罪とうけ人のとみはあら

ゆゑしぬ時よ寛政の十とせとつふとし
 の中冬望の日草あけ乃あはれ津越
 村義久羅幽蘭齋よ忘ふは

陸奧仙臺侍醫西磐水大槻玄澤先生口授

門人 丹波福智山醫官有馬文仲元晁筆記

伊勢洞津圖南越村深藏子虛父校正

幽蘭齋藏板



彫工 洞津八町 正木傳右衛門
彫工 洞津八町

明治九年十二月得之



寬政十一年己未二月

製丸本所

勢易洞津東町
山形屋東



